



Title	岡奈津子氏の研究業績：概観と一覧
Author(s)	宇山, 智彦
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 26-34
Issue Date	2022-07-31
DOI	10.14943/jacas.18.26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91631
Type	article
File Information	JB18_002uyama.pdf



[Instructions for use](#)

岡奈津子氏の研究業績

— 概観と一覽 —

宇山 智彦

2022年1月27日、日本中央アジア学会理事・編集委員で、日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター・ガバナンス研究グループ長の岡奈津子さんが急逝した。学生時代からの友人である筆者にとって、岡さんの死は胸が張り裂けるような悲しい出来事だが⁽¹⁾、ここでは彼女の研究者としての姿に絞って、業績を回顧したい。

岡さんは1987年に長野県諏訪清陵高等学校を卒業して東京大学に入学し、教養学部教養学科ロシア科に在学中の1990年から91年にかけて、日ソ政府間の協定に基づくソ連政府奨学金留学制度の第2期生として、モスクワ国立教育大学に留学した。ソ連時代最末期の激動の時期である。この時にさまざまな政治の動きを目撃し、市民生活の困難を経験したことは、その後の岡さんの研究の糧となったと思われる。帰国後の1992年に東京大学教養学部を卒業して大学院総合文化研究科地域文化研究専攻に進学し、94年に修士課程を修了した。

学部生時代に日韓学生会議で活動し、実行委員長を務めたこともある岡さんの大学院での専門は、(旧)ソ連の朝鮮人の歴史と現状の研究で、修士論文のテーマは「ロシア極東における朝鮮人社会の政治・経済的変容：農業集団化と強制移住」であった。強制移住先である中央アジアでの朝鮮人の生活・活動も継続的に調査し、その成果は半谷史郎氏との共著『中央アジアの朝鮮人』(2006年)や英語・ロシア語の論文などに結実した。これらは現在も、旧ソ連の朝鮮人に関する信頼できる研究文献であり続けている。

朝鮮人の問題に限定せず本格的に中央アジア研究を始めたのは、1994年にアジア経済研究所(アジ研)に入所してからだった。同研究所の清水学氏を中心に実施されていた中央アジアに関する研究プロジェクトである「市場経済化展望総合研究」事業のメンバーとして、カザフスタンにおける民営化や、他のCIS(独立国家共同体)諸国との経済関係を研究した。民営化について現地の調査機関に世論調査を委託したのは、当時の日本の中央アジア研究の中で先進的な取り組みであり、一般市民の見方を重視する岡さんの研究手法の確立の一過程

(1) 個人的な追悼文としては、宇山智彦「哀惜 岡奈津子さん」『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』第164号、2022年、23-26頁。

でもあった。

しかし岡さんの関心の中心は、経済よりも民族問題と政治にあった。1994年には、在カザフスタン大使館の専門調査員だった筆者が岡さんを政治家や民族運動家に紹介したが、その後彼女はアジ研の海外派遣員として、1998～99年のコロンビア大学留学（ハリマン研究所客員研究員）を経て、1999～2001年にアルマトゥに滞在（カザフスタン発展研究所客員研究員）し、主に野党系の政治活動家や民族団体の関係者、アナリスト、ジャーナリストなどと幅広く交流した（本号掲載のドスム・サトバエフ氏の追悼文参照）。

この滞在中およびその後の調査の成果として、岡さんはカザフスタンのロシア人、ウイグル人、ウズベク人に関する論文や、カザフスタンの政治体制・政治エリートについての論文を、次々と発表した。特に諸民族団体の指導者たちが当局による懐柔を受けて協力しつつ、隣国との関係維持や民族内での競争を含め多彩な活動を展開する様子をインタビューに基づいて活写する研究は、独自性の高いものだった。2007年には、“The Management of Ethno-Political Diversity in Kazakhstan, 1991–2005”と題する博士論文を、イギリスのリーズ大学政治国際関係学科に提出し、翌年博士号（PhD）を取得した。以前から行っていた朝鮮人研究と合わせ、カザフスタンのさまざまな民族の社会生活や政治的立場を、同国の権威主義体制や在外カザフ人帰還政策、ロシアの在外ロシア人政策などと組み合わせることで専門家として、国際的に知られるようになった。

2010年頃から岡さんは、カザフスタンの市民が日常的に（そして外国人も時に）直面する社会問題の一つである腐敗（賄賂やコネ）という、新しいテーマに取り組んだ。この研究のために岡さんは2011年にアジ研の海外調査員として再びアルマトゥに滞在し、その後も現地調査を繰り返した。フットワークが軽く、人と本音で話し合える関係を築くのが得意な岡さんの調査能力は、このテーマの研究で存分に発揮された。言うまでもなく、腐敗というセンシティブな問題の調査は勇気を必要とし、かなりの困難を伴うものであり、インタビューがうまくいかない場合や、警察に連行されることさえあった。そうした苦勞の一端は、のちに著書のあとがきに書かれている。

腐敗研究の成果は、*Central Asian Survey*、*Problems of Post-Communism*、*Central Asian Affairs* という3つの国際学術雑誌に発表されたのち、著書『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）にまとめられた。この本は、148人の多様な職業のカザフスタン市民からの聞き取りに基づいて、警察、司法、兵役から企業活動、教育、医療に至るさまざまな分野での腐敗の実態を、衝撃的とも言えるほど鮮明に描いている。そしてこれがカザフスタン社会の後進性ではなく、手続のために長い時間をかけたり神経をすり減らしたりすることを避けたい人の増加や、公職に就くための贈賄の費用を就任後の収賄によって回収するという構造的な問題の深刻化といった、市場経済化に伴う変化によるもので

あることを、説得力をもって示している。

また、ソ連時代に不正行為ないし問題処理の中心的手段だったコネの重要性が失われたわけではなく、決定権を持つ人物にアクセスし、取引を確実なものにするためにコネは依然として大きな意味を持っていると指摘し、コネとカネの使い分けや組み合わせを分析している点も、この研究の独自性である。全体として、賄賂を単に悪として糾弾するのではなく、人間関係や価値観の変化と関連する問題としてとらえ、賄賂を含む「非公式な問題解決」の方法を駆使して生きる人々のたくましさを描き出しているのは、岡さんがカザフスタン社会に深く入り込み、温かい目を向けてきたことの現れと言えよう。現代アジア研究における独創的かつ優れた業績に与えられる樫山純三賞(第15回、2020年)を受賞したのは、この本にふさわしい榮譽であった。

岡さんは、研究者間の交流の面でも大きな貢献をした。カザフスタンの研究者とも、諸外国のカザフスタン研究者とも、幅広いネットワークを持っていた。2015年にアジ研の近所である神田外国語大学と幕張メッセで開かれた、ICCEES(国際中欧・東欧研究協議会)幕張世界大会では、裏方を買って出て多くの地味な仕事をこなした。日本中央アジア学会ではさまざまな活動に携わったが、特に2019年度年次大会(2020年3月)で、本学会とアジ研の雑誌『アジア経済』との共同企画として、公開パネルセッション「途上国研究の最前線としての中央アジア：比較政治、開発経済、現代史、環境の視点から」をコーディネートした。その記録は、同誌第61巻第3号(2020年)に掲載されている。若手研究者との交流にも熱心で、同じく『アジア経済』第62巻第4号(2021年)のために、ソ連解体30年をテーマに若手の政治学者3人とのオンライン座談会を実施した。日本にいる中央アジア出身の留学生・研究者にも常に励ましを与え、慕われていたことは、本号掲載のクアニシ・タスタンベコワ氏の追悼文から分かるであろう。

岡さんの研究全体の特徴は、まず、優れたロシア語力と並外れたコミュニケーション能力によってカザフスタン社会に深く入り込み、一般の人々と生活感覚を共有しながら現地調査を行ったことにある。調査のエピソードや苦労話は、『アジ研ワールド・トレンド』などで、ユーモアを込めて書かれており、楽しげに話す岡さんの表情と声が浮かんでくるような文章である。他方、そうした型破りとも言える現地調査の成果を論文にまとめる際の筆致は極めて冷静であり、理論や先行研究を十分に把握し、基礎資料や統計データを使いながら几帳面に書かれていた。同時に、冷静で学問的な書き方の背後には、岡さんが少数者・弱者に向ける優しい目と正義感も感じられた。優しさや正義感、岡さんが日常の人間関係においても実践していたことであり、たとえば本学会のハラスメント防止宣言(2021年3月21日総会決議)の作成過程での岡さんの貢献は大きかった。これからますます日本そして世界の中央アジア研究を牽引することが期待されていた岡さんの逝去は、学界にとって本当に大きな損失であり、残念でならない。

業績一覧⁽²⁾

著書・編書

- 2002年 (co-authored with Nurbulat Masanov, Erlan Karin, and Andrei Chebotarev) *The Nationalities Question in Post-Soviet Kazakhstan*, M.E.S. Series No. 51, Chiba: Institute of Developing Economies, 159 p. [執筆章：“Nationalities Policy in Kazakhstan: Interviewing Political and Cultural Elites,” pp. 109–159.]
- 2006年 (半谷史郎と共著)『中央アジアの朝鮮人：父祖の地を遠く離れて(ユーラシア・ブックレット93)』東洋書店、全63頁。
- 2007年 (単著) *Managing Ethnicity under Authoritarian Rule: Transborder Nationalisms in Post-Soviet Kazakhstan*, Chiba: Institute of Developing Economies, iii+247 p.
- 2008年 (編著)『移住と「帰郷」：離散民族と故地(調査研究報告書)』アジア経済研究所、全v+61頁[執筆章：「祖国を目指して：在外カザフ人のカザフスタンへの移住」1–17頁]。
- 2016年 (単著) *Другая Япония. Жизнь без чайной церемонии*. Алматы: Досым Сатпаевтың жеке қоры, 168 с.
- 2019年 (単著)『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』白水社、全245+8頁。

論文

- 1996年 「一般市民の民営化への参加とその評価：カザフスタンのケース」清水学・松島吉洋編『中央アジアの市場経済化：カザフスタンを中心に(研究双書461)』アジア経済研究所、193–220頁。
- 1998年 「ロシア極東の朝鮮人：ソビエト民族政策と強制移住」『スラヴ研究』45、163–196頁。
「CISにおける経済統合：カザフスタンの戦略」清水学編『中央アジア：市場化の現段階と課題(研究双書489)』アジア経済研究所、131–165頁。
「ソ連における朝鮮人強制移住：ロシア極東から中央アジアへ」『岩波講座世界歴史第24巻 解放の光と影 1930年代–40年代』岩波書店、65–90頁。
- 1999年 「カザフスタンの人口移動(Discussion Paper No. D98-16)」一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト、全36頁。
- 2000年 「1999年カザフスタン議会選挙：「民主化」の演出と投票結果の改ざん」『ロシア研究』30、73–92頁。
「中央アジア諸国をめぐる新経済関係の構築」西村可明編『旧ソ連・東欧における国際経済関係の新展開』日本評論社、189–218頁。

(2) researchmap、CiNii Research、アジア経済研究所ウェブサイトをはじめとするインターネット情報と、筆者が持つ資料をもとに作成した。インタビューや座談会は含めていない。

“Deportation of Koreans from the Russian Far East to Central Asia,” in Komatsu Hisao, Obiya Chika, and John S. Schoeberlein, eds., *Migration in Central Asia: Its History and Current Problems*, Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp. 127–145.

「カザフスタンのロシア人をめぐる最近の動き：「分離主義活動」と「ロシアとの統合要求」が示唆するもの」『現代の中東』29、27–38頁。

2001年 “The Korean Diaspora in Nationalizing Kazakhstan: Strategies for Survival as an Ethnic Minority,” in German N. Kim and Ross King, eds., *Koryŏ Saram: Koreans in the Former USSR*, Korean and Korean American Studies Bulletin, 12(2/3), New Haven: East Rock Institute, pp. 89–113.

Корейцы в современном Казахстане: стратегия выживания в роли этнического меньшинства // Диаспоры. № 2/3. С. 194–220.

2002年 「ロシアの対「同胞」政策と在外ロシア人：カザフスタンのケース」『ロシア研究』34、76–95頁。

2003年 「カザフスタンにおける民族運動の翼賛化：予想された紛争はなぜ起きなかったのか」武内進一編『国家・暴力・政治：アジア・アフリカの紛争をめぐって（研究双書534）』アジア経済研究所、451–492頁。

2004年 Государство – этническое меньшинство – родина этого меньшинства (Русские, уйгуры и корейцы в постсоветском Казахстане и к своей родине) // Казахстан и Россия: общества и государства / ред.-сост. Д. Е. Фурман. М.: Права человека. С. 389–405.

「「近い外国」のロシア人：同胞法と国籍法に見るロシアのジレンマ」田畑伸一郎・末澤恵美編『CIS：旧ソ連空間の再構成』国際書院、93–112頁。

「民族と政治：国家の「民族化」と変化する民族間関係」岩崎一郎・宇山智彦・小松久男編『現代中央アジア論：変貌する政治・経済の深層』日本評論社、81–102頁。

2005年 「カザフスタンにおける地方政治エリート(1992～2001年)」酒井啓子・青山弘之編『中東・中央アジア諸国における権力構造：したたかな国家・翻弄される社会（アジア経済研究所叢書1）』岩波書店、111–142頁。

2006年 「カザフスタン大統領選挙：約束されていたナザルバエフの勝利」『ロシア東欧貿易調査月報』51(3)、51–60頁。

“The ‘Triadic Nexus’ in Kazakhstan: A Comparative Study of Russians, Uighurs, and Koreans,” in Ieda Osamu, Balázs Majtényi et al., eds., *Beyond Sovereignty: From Status Law to Transnational Citizenship?* Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, pp. 359–380.

「カザフスタン：権威主義体制における民族的亀裂の統制」間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制（研究双書555）』アジア経済研究所、211–248頁。

- 2007年 「民族化するカザフスタンにおけるコリアン・ディアスポラ：エスニック・マイノリティとしての生き残り戦略」高全恵星監修・柏崎千佳子訳『ディアスポラとしてのコリアン：北米・東アジア・中央アジア』新幹社、491–527頁。
- “Transnationalism As a Threat to State Security? Case Studies on Uighurs and Uzbeks in Kazakhstan,” in Uyama Tomohiko, ed., *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia*, Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, pp. 351–368.
- 2008年 「2007年カザフスタン下院選挙：大統領与党による「一党独裁」の成立」『現代の中東』44、28–36頁。
- 2009年 “Ethnicity and Elections under Authoritarianism: The Case of Kazakhstan,” IDE Discussion Paper No. 194, Chiba: Institute of Developing Economies, 25 p.
- 2010年 「同胞の「帰還」：カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策」『アジア経済』51(6)、2–23頁。
- 2011年 “Neither Exit nor Voice: Loyalty as a Survival Strategy for the Uzbeks in Kazakhstan,” IDE Discussion Paper No. 286, Chiba: Institute of Developing Economies, 17 p.
- 2012年 (半谷史郎と共著)「中央アジアに強制移住された諸民族：歴史と現在」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編『中央アジア(朝倉世界地理講座5)』朝倉書店、324–334頁。
- 2013年 “A Note on Ethnic Return Migration Policy in Kazakhstan: Changing Priorities and a Growing Dilemma,” IDE Discussion Paper No. 394, Chiba: Institute of Developing Economies, 13 p.
- 2015年 “Informal Payments and Connections in Post-Soviet Kazakhstan,” *Central Asian Survey* 34(3), pp. 330–340.
- 「「帰還民」へのまなざし：カザフスタンの在外カザフ人呼び寄せ政策と現地社会」山根聡・長縄宣博編『越境者たちのユーラシア(ユーラシア地域大国論5)』ミネルヴァ書房、135–157頁。
- 2019年 “Grades and Degrees for Sale: Understanding Informal Exchanges in Kazakhstan’s Education Sector,” *Problems of Post-Communism* 66(5), pp. 329–341.
- “Changing Perceptions of Informal Payments under Privatization of Health Care: The Case of Kazakhstan,” *Central Asian Affairs* 6(1), pp. 1–20.
- 2020年 「中国・新疆ウイグル自治区のカザフ人：不法入国とカザフスタン政府のジレンマ」アジア経済研究所ウェブサイト(IDEスクエア)、全14頁。
- 2021年 「2020年キルギス共和国政変の背景と帰結：腐敗に蝕まれる「民主主義の島」」アジア経済研究所ウェブサイト(IDEスクエア)、全12頁。

小論・読み物など

- 1989年 「手作りの友情：第4回日韓学生会議」『現代코리아』297、53-61頁。
- 1995年 「ロシア極東(日本における発展途上地域研究1986～94・地域編)」『アジア経済』36(6)、352-359頁。
- 1998年 「アメリカの中央アジア研究(研究情報)」『現代の中東』25、63-67頁。
- 1999年 「カザフスタン／民族語の復興とそのジレンマ：国家語の制定をめぐる」『アジア研ワールド・トレンド』42、19-20頁。
- 2000年 (Alekssei Nekrasovと共著)「フォト・エッセイカザフスタン：聖なる場所の復興」『アジア研ワールド・トレンド』57、31-34頁。
- 2002年 「中央アジア諸国における米軍のプレゼンス：歴史的チャンスか、新たな紛争の種か」酒井啓子編『「テロ」と「戦争」のもたらしたもの：中東からアフガニスタン、東南アジアへ(アジア研トピックリポート45)』アジア経済研究所、51-60頁。
- 「カザフスタン／ナザルバエフ大統領の素顔：独裁者か、裸の王様か」『アジア研ワールド・トレンド』79、4-7頁。
- 2003年 「カザフスタン／民族運動の抑圧と懐柔」『アジア研ワールド・トレンド』94、39-41頁。
- 2004年 「旧ソ連のロシア人問題：ロシアにとっての「同胞」とは？」『アジア研ワールド・トレンド』104、17-19頁。
- 2005年 「カザフスタンのウイグル人」『アジア研ワールド・トレンド』112、24-27頁。
- 「日本人のみた外国 便座の謎：旧ソ連トイレ事情(カルチャー・ショック)」『アジア研ワールド・トレンド』119、48頁。
- 2006年 「カザフスタン・ウズベキスタン国境にて」『現代の中東』41、1頁。
- 2007年 「カザフスタンにおける首都移転：「処女地の町」から^{アスタナ}首都への変貌」『アジア研ワールド・トレンド』142、16-19頁。
- 2011年 「パートナー探しは海外で(異文化言い分 EVEN)」『アジア研ワールド・トレンド』185、56-57頁。
- 「アルマトゥにおける物価高と収入格差」アジア経済研究所ウェブサイト(海外研究員レポート)、全6頁。
- 「物価高と家計の謎：カザフスタン・アルマトゥからのレポート」『アジア研ワールド・トレンド』194、42-45頁。
- 「下院選挙を控えたカザフスタン：経済格差と社会不安」アジア経済研究所ウェブサイト(海外研究員レポート)、全5頁。
- 2012年 「インタビューは時の運(フィールドワーク心得帖 第31回)」『アジア研ワールド・トレンド』207、42-43頁。

- 2013年 「カザフスタンにおける日常的腐敗：フィールドワークに基づく考察」『アジア研ワールド・トレンド』209、37-42頁。
- 「カザフスタンのコイン：独自通貨導入から現在まで」『アジア研ワールド・トレンド』215、22-23頁。
- 「父祖の地を目指して：カザフスタンに『帰還』する在外カザフ人」『アジア研ワールド・トレンド』216、27-33頁。
- 2014年 「ロシアによるクリミア併合のインパクト：カザフスタンの対応と「ロシア人問題」」アジア経済研究所ウェブサイト、全3頁。
- 「特集にあたって（特集 途上国の出会いと結婚）」『アジア研ワールド・トレンド』226、2-3頁。
- 「「点数・学位売ります」：カザフスタンの教育機関における不正とその構造」『アジア研ワールド・トレンド』229、38-46頁。
- 2015年 「市場経済化後のカネとコネ：カザフスタンの人々の暮らしはどう変わったのか」『アジア研ワールド・トレンド』238、51-57頁。
- 2016年 「命の沙汰も金次第：カザフスタンの医療分野における贈収賄」『アジア研ワールド・トレンド』249、32-38頁。
- 2017年 「ソ連：懐かしの機内食（世界珍食紀行 第7回）」『アジア研ワールド・トレンド』262、39頁。
- 「警官はなぜ賄賂を取るのか：カザフスタンの事例」『アジア研ワールド・トレンド』263、28-35頁。
- 2018年 “Agashka,” in Alena Ledeneva, ed., *The Global Encyclopaedia of Informality: Understanding Social and Cultural Complexity*, vol. 1, London: UCL Press, pp. 86-88.
- 「デニス・テン選手を悼んで：フィギュアスケーターの死がカザフスタン社会に問いかけたもの」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全5頁。
- 2020年 「中国 巨大収容所と化す新疆ウイグル自治区：激化する米中対立とカザフスタンの思惑（IDE-JETRO × Country Review）」『国際開発ジャーナル』765、60-62頁。
- 2021年 「カザフスタン：感染症には馬乳が効く（続・世界珍食紀行 特別編）」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全3頁。
- 「カザフスタン：変わらない政治、変化する社会」『ユーラシア研究』64、26-28頁。

書評

- 1995年 「Edited by Anastasia Posadskaya; Translated by Kate Clark, *Women in Russia: A New Era in Russian Feminism*」『ロシア史研究』57、84-85頁。
- 2000年 「Touraj Atabaki and John O’Kane eds, *Post-Soviet Central Asia*」『アジア経済』41(1)、104-108頁。

- 2005年 (書評論文、半谷史郎と共著)「旧ソ連朝鮮人研究の現状：李愛俐娥著『中央アジア少数民族社会の変貌：カザフスタンの朝鮮人を中心に』を読んで」『アジア経済』46(10)、66-79頁。
- 2006年 「Sally N. Cummings, *Kazakhstan: Power and the Elite*」『アジア経済』47(9)、49-54頁。
- 2008年 (資料紹介)「水谷尚子『中国を追われたウイグル人：亡命者が語る政治弾圧』」『現代の中東』45、63頁。
- 2009年 「Bhavna Dave, *Kazakhstan: Ethnicity, Language and Power*」『アジア経済』50(10)、62-67頁。
- 2010年 (紹介)「堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』」『アジア経済』51(12)、81頁。
- 2021年 「Diana T. Kudaibergenova, *Toward Nationalizing Regimes: Conceptualizing Power and Identity in the Post-Soviet Realm*」『アジア経済』62(2)、107-110頁。

翻訳

- 1991年 (井上徹、梅津道子、篠田直彦、高柳俊男、宮内正義、米津篤八と共訳) 現代語学塾『レーニン・キチ』を読む会編訳『在ソ朝鮮人のペレストロイカ』凱風社、全262頁。
- 1998年 (田中水絵と共訳) アナトーリー・T・クージン著『沿海州・サハリン近い昔の話：翻弄された朝鮮人の歴史』凱風社、全317頁。
- 2008年 ゲルマン・キム「外国人のみた日本 カルチャー・ショック？ NO、気候ショック？ YES！(カルチャー・ショック)」『アジア研ワールド・トレンド』158、46頁。

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)